

登録有形文化財 帯解駅舎

保存改修のための本屋変遷資料

～地域が誇れる、市民が誇れる、全国に自慢できる駅舎づくり～



2023年3月

帯解駅舎保存・活用の会

目次

はじめに	2P
概略	3P
1 現在の駅舎平面と推定変遷図	4P
2 明治 31 年(1898)の『鉄道工事設計参考図面一停車場之図』から	5P
3 明治 34 年(1901)？の吉野鉄道停車場本屋図	10P
4 明治 43 年(1910)1 月現在の帯解駅構内図	11P
5 大正 7 年(1918)の小停車場本屋標準図	11P
6 大正 15 年(1926)の帯解駅の大改築と円照寺との関係	14P
7 昭和 5 年(1930)の小停車場本屋標準図	16P
8 昭和 30 年代初めから 40 年代初めの帯解駅舎の写真	17P
9 現代の帯解駅舎について	19P
10 昭和初期の駅舎を復元	20P
<参考資料>	21P

はじめに

現在、「昭和 40 年代の改修と思われる駅舎の現状を起点に保存改修」を主張する奈良市と、「大正 15 年の大改築時への復元整備」を求める本会との間で、保存改修時期を巡って意見が分かれています。

その原因や詳細はおくとしまして、「奈良市市民参画及び協働によるまちづくり条例」の趣旨からしても、関係者の丁寧な話し合いが求められることはいまでもありません。

ところで、帯解町郷土研究会編『帯解町郷土誌』（編者 廣瀬広中、昭和 28 年 4 月 1 日発行、58 年再版）によりますと、明治 31 年(1898)に建設された帯解駅舎は、大正 15 年(1926)の 8 月から翌昭和 2 年の 1 月にかけて大改築がおこなわれたと記しています。

上記記録を尊重する本会としましては、大正 15 年の駅舎に復元整備する選択の方が、現状を起点とする保存改修よりも総合的に見て保存改修の波及効果が大きいと考えています。

その理由を以下に簡潔に述べてみます。

- ①先人の記録を復元整備という見える形で未来に継承することは、改修後の地域の励みとなって地域アイデンティティの強化に結び付く。
- ②文化財審議会が「地方駅舎として標準的な規模で、私鉄が整備した明治期駅舎として貴重」と評価した登録有形文化財価値の増幅に結び付く。
- ③以上により、地域住民や乗降客の駅舎への愛着が高まるだけでなく、地域としても、また奈良市としても「万葉まほろば線で唯一の登録有形文化財の駅」との自信と誇りをもって全国に PR 発信ができる。
- ④歴史・文化的な価値が高い駅舎は、観光振興を始めとする地域の活性化拠点の器にふさわしいだけでなく、本格化が求められている奈良市南部の地域振興・まちづくり政策の起爆剤にもなり得る。

さて、大正 15 年の大改築は、大正 7 年(1918)の鉄道院通達「小停車場本屋標準図」を参考にした公算が大きいです。また、その後、昭和 30 年代半ばまでは改築がおこなわれず、現駅舎の事務室と待合室の間仕切形状等の大がかりな改修は昭和 40 年代かと思われます。

本資料は、登録有形文化財である帯解駅舎を保存改修するにあたり、その来歴をしっかりと踏まえかつそれを尊重して保存改修に向き合う必要があるとの認識で作成したものです。

いずれにしましても、奈良市・JR 西日本等の関係者の実情や耐震補強等への対応を踏まえながら、保存改修のあり方についての情報共有と丁寧な話し合いを重ねながらお互いに納得し合える最適解を見つけ出し、後世に憂いを残さない帯解駅舎の保存改修のあり方だと思っています。

関係者のご理解とご協力を心からお願い申し上げます。

2023 年 3 月

帯解駅舎保存・活用の会
代表 木原勝彬

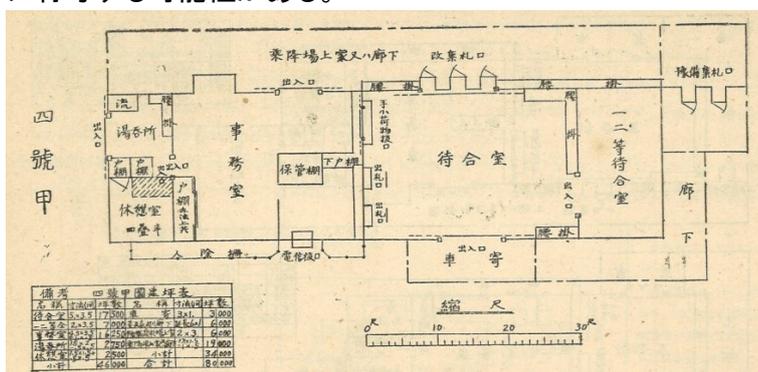
概略

■明治 31 年(1898)建設の帯解駅舎の改築・改修状況等の変遷を探るため、明治 25 年(1892)の鉄道敷設法公布以降の駅舎建設に関わる停車場本屋の標準設計資料の存在を、奈良県立図書情報館、京都鉄道博物館、国立国会図書館等で調査した。

本変遷資料は、主として鉄道創業期である明治 31 年(1898)の鉄道局通達『鉄道工事設計参考図面一停車場之図』、明治 39 年(1906)の鉄道国有化法の公布以降の大正 7 年(1918)の鉄道院通達『小停車場本屋標準図』、大正 11 年(1922)の新鉄道敷設法制定後の昭和 5 年(1930)の鉄道省通達『小停車場本屋標準図』を参考にしながら、帯解駅舎の変遷状況を検討した。

■大正 15 年(1928)の帯解駅舎大改築時期を帯解駅舎の復元整備目標と設定した場合、その復元整備に必要な裏付け資料としては、大正 7 年(1918)の『小停車場本屋標準図』の中の 4 号甲タイプが参考になるとと思われる。

本タイプの 1・2 等待合室は、貴賓室、あるいは特別待合室と呼ばれていた現駅舎の北側に張り出した待合室部分に符号する可能性がある。



事務室と待合室を間仕切る「手小荷物扱口」と 2 つの「出札口」は一直線状に配置。また、間仕切の位置は、下図の現状平面図の荷物窓口の位置となっている。

木原英一『現代鐵道草叢書 線路及停車場』(鉄道会出版部、昭和 2 年(1929) 7 月、京都鉄道博物館蔵)

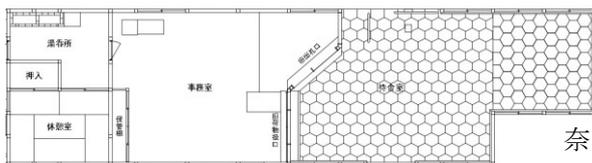
■昭和 34 年 8 月撮影の帯解駅舎の写真から、荷受扱口と出札口の間仕切りは東西の直線状で、改札口側から荷受扱口・出札口の順となっており、大正 15 年の大改築時を引き継いだものと思われる。



廣瀬政彦氏提供

■鉄道ジャーナル社編集発行『鉄道 100 年記念写真集—日本の駅』(昭和 47 年 10 月 14 日)の樺本駅と三輪駅では、荷受扱口と出札口の位置と形状が現状と一致する。帯解駅内部の判別は困難であるが、昭和 47 年(1972)以前に、現状の形状に改修がなされたものと思われる。

現状平面



奈良市教育委員会文化財課



樺本駅

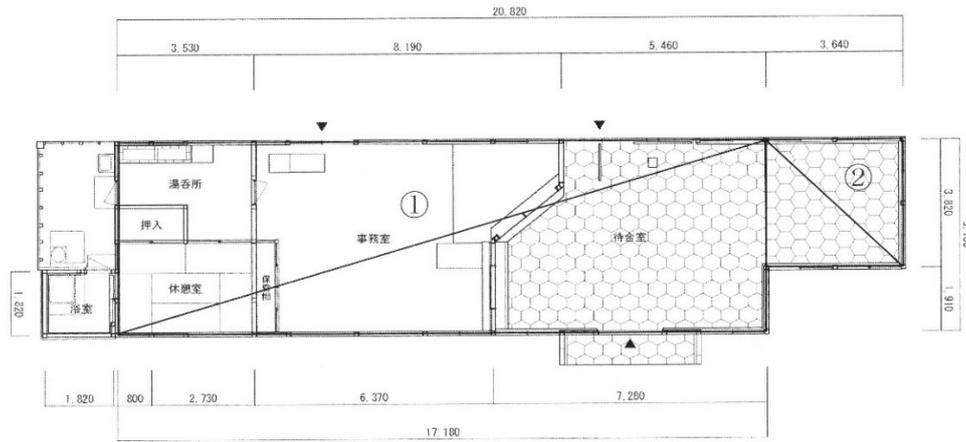
桜井線 樺本
①明治31年5月11日 ②不明 ③なし ④なし ⑤天理
教本部(南東3km) 弘仁寺(東2km) ⑥なし ⑦天



三輪駅

桜井線 三輪
①明治31年5月11日 ②大正3年4月(全部) ③なし
④なし ⑤三輪山(東500m) 大神神社 山の辺の道

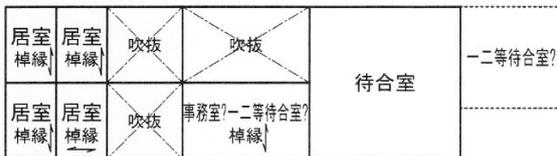
1 現在の駅舎平面と推定変遷図(奈良市教育委員会文化財課)



	(南北)	(東西)	面積 (㎡)
①	17.180 ×	5.730	98.4414
②	3.640 ×	3.820	13.9048
合計			112.3462 ≒ 112 ㎡

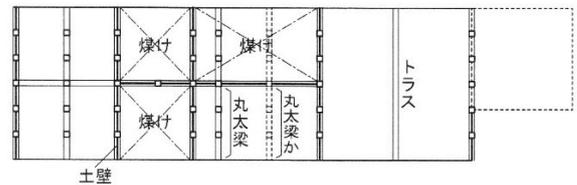
< 推定変遷図 >

明治31年(1898)建設当初



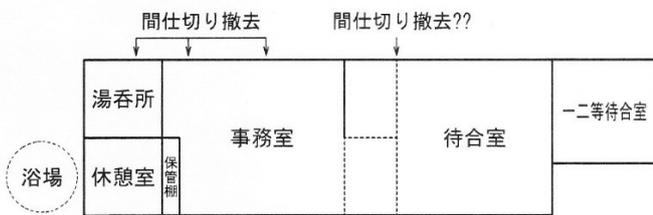
この辺りが駅長官舎と思われる
(線路側は駅務に用いた可能性も)

平面

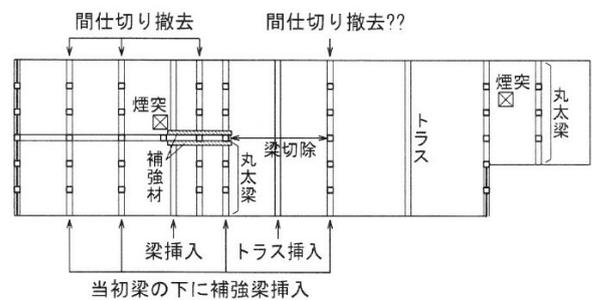


小屋組

大正15年(1926)

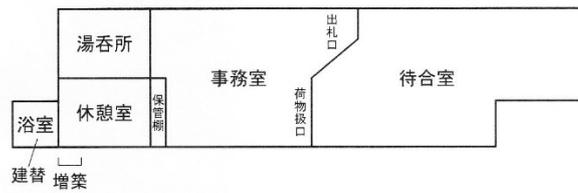


平面



小屋組

昭和40年代頃

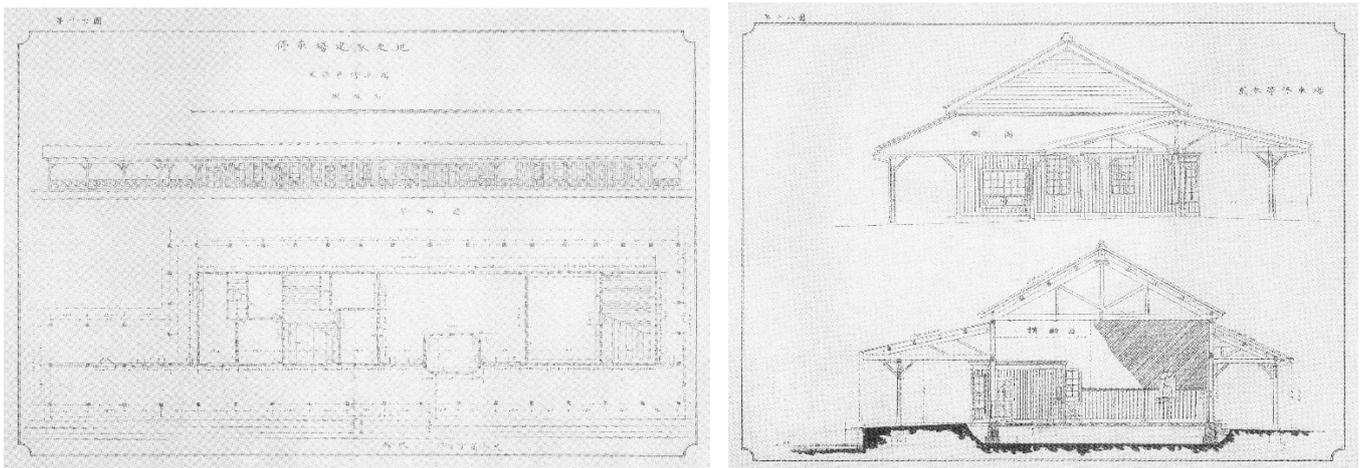


2 明治31年(1898)の『鉄道工事設計参考図面—停車場之図』から

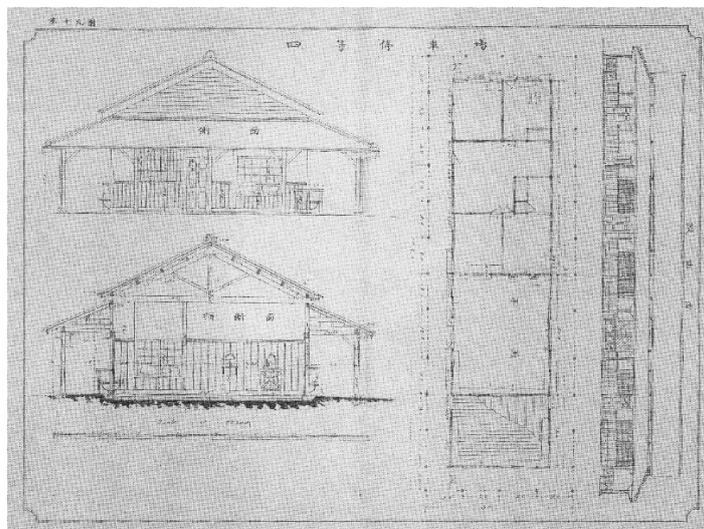
交通設計・駅研グループ『駅のはなし—明治から平成まで—』(交通研究協会、平成6年12月)によると、「大部分の中小駅舎については、明治31年に標準設計にあたる停車場定規が鉄道局から通達され『鉄道工事設計参考図面—停車場之図』によって、標準となる駅舎の図面が提示されたのである」とし、第壹等停車場、貳等停車場、参等停車場、四等停車場、五等停車場の立面・平面・断面図が示されたとしている。また、当時の駅舎は質素で、乗客が増えてから直せるという考え方であった様である。

内田録雄編『鉄道工事設計参考図面』(共益商社書店、1898年6月、土木学会土木図書館所蔵)から、一等を除く二等、三等、四等、五等の図面を下記に紹介する。

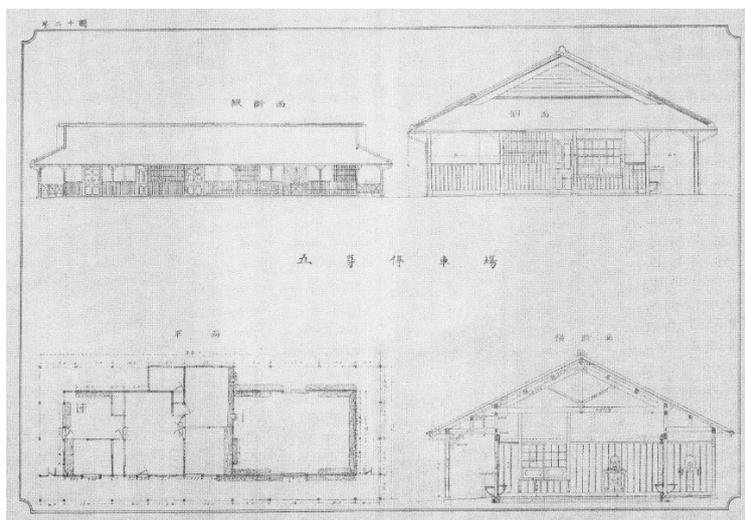
<二・三等停車場図>



<四等停車場図>



<五等停車場図>



奇しくも同年11月（登記簿は12月日不詳、帯解郷土誌では5月8日）に奈良鉄道の駅として建設された帯解駅舎も、五等停車場の標準図面を参考に建設された可能性もあり得る。

しかしながら、明治31年当時、あるいはそれ以前に奈良鉄道が建設した桜井線・奈良線の駅舎を鉄道ジャーナル社編集発行『鉄道100年記念写真集—日本の駅』（昭和47年10月14日）に掲載されている発行当時の駅舎の正面写真を見ると、帯解駅と同型の軒庇（切妻の車寄せ付きも有り）を取り付けている。

明治天皇が明治41年12月11日に、陸軍大演習の総監で帯解駅を下車した時の以下の写真（『特別大演習写真帳』（明治42年、国立国会図書館蔵））には、南面妻側の軒庇が写っており、建築当時からのものと思われる。



『鉄道100年記念写真集—日本の駅』に見る、昭和47年の発行当時の駅舎

<桜井線>①は建設年月、②は改築等の年月



桜井線 ①明治31年5月11日 ②昭和46年1月（一部） ③なし
 きょう ぼて ④和 安全 増収 ⑤なし ⑥なし
 京 終



桜井線 ①明治31年5月11日 ②不明 ③なし ④なし ⑤円照
 帯 解 寺（皇族の尼寺） 正暦寺 ⑥なし

①明治31年5月11日、②昭和46年1月（一部）

①明治31年5月11日、②不明



桜井線
いちの
標本
①明治31年5月11日 ②不明 ③なし ④なし ⑤天理
教本部(南東3km) 弘仁寺(東2km) ⑥なし ⑦天
①明治31年5月11日、②不明



桜井線
やなぎ
柳本
①明治31年5月11日 ②大正3年(一部)・昭和5年11
月(一部) ③なし ④なし ⑤大和神社(もと官幣大
①明治31年5月11日、②大正3年一部、昭和5年
11月(一部)



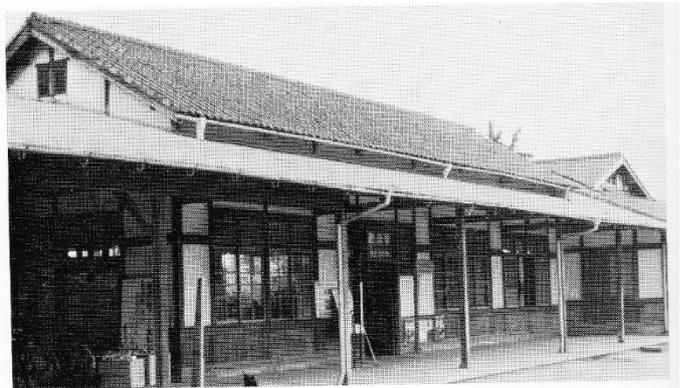
桜井線
三輪
①明治31年5月11日 ②大正3年4月(全部) ③なし
④なし ⑤三輪山(東500m) 大神神社 山の辺の道
①明治31年5月11日、②大正3年4月(全面)



桜井駅 ①明治26年5月23日、②不明



桜井線
か
久山
①大正2年4月21日 ②不明 ③なし ④なし ⑤天香
久山(大和三山の一つ 南800m) 藤原宮跡(特別史跡
①大正2年4月21日、②不明



桜井線
うね
び傍
①明治26年5月23日 ②昭和15年2月(一部) ③なし
④なし ⑤榎原神宮(南2km) 大和三山 藤原宮 明
①明治26年5月23日、②昭和15年2月(一部)

<奈良線>



奈良線 上粕
①明治29年8月11日 ②不明 ③なし ④なし ⑤山城茶の本場 茶問屋50家 高麗寺跡 ⑥なし ⑦駅前ホー

①明治29年8月11日、②不明



奈良線 新田
①明治29年1月25日 ②不明 ③なし ④なし ⑤円蔵院(南150m) ⑥なし

①明治29年1月25日、②不明



奈良線 長池
①明治29年1月25日 ②大正元年9月(一部) ③なし ④笑顔で ⑤なし ⑥なし

①明治29年1月25日、②大正元年9月(一部)



奈良線 青谷山城
①大正15年2月13日 ②なし ③なし ④なし ⑤青谷梅林(東700m) 山城温泉(1.5km) ⑥なし

①大正15年2月13日、②なし



奈良線 柵倉
①明治29年3月13日 ②昭和47年4月(一部) ③なし ④なし ⑤蟹満寺(国宝釈迦如来像 1.5km) 神童寺(茶で梅子の産地 3km) ⑥なし

①明治29年3月13日、②昭和47年4月(一部)

*奈良鉄道が建設した桜井線・奈良線の駅舎では、上粕、棚倉が帯解駅と似ているが、正面出入口への石段が無い棚倉駅が特に似ている。

但し、正面入り口左側に位置する待合室の形態は、落ち棟屋根部分(特別の待合室)が奥に張り出す帯解駅舎形態と異なっている。

昭和40年頃の天理市駅(旧丹波市駅)



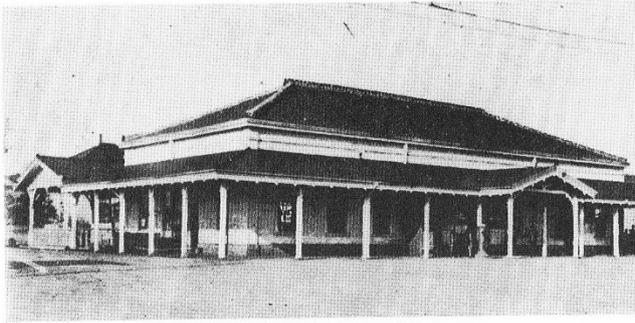
旧天理市駅 写真撮影 西田博嘉氏(昭和40年(1965)頃に撮影)

①明治31年5月11日

②昭和40年9月1日(全部)

(①、②は、『鉄道100年記念写真集-日本の駅』から)

初代の奈良駅
大正四年頃。



大正 4 年頃



二代目の奈良駅
昭 and 九年、完成
間近の現在の駅舎。

昭和 9 年



櫛本駅 明治 31 年頃か



桜井駅 明治 31 年頃か

建設当初の京終駅

奈良県立図書館所蔵(奈良鉄道株式会社と京終停車場 奈良鉄道名勝案内
(明治 36 年刊行)より、宇治市歴史資料館画像提供)



JR 畝傍駅舎の保存活用を進める会『JR 畝傍駅のこれまでとこれから』(令和4年10月16日)から



初代 畝傍駅駅舎(1893年・明治26年)



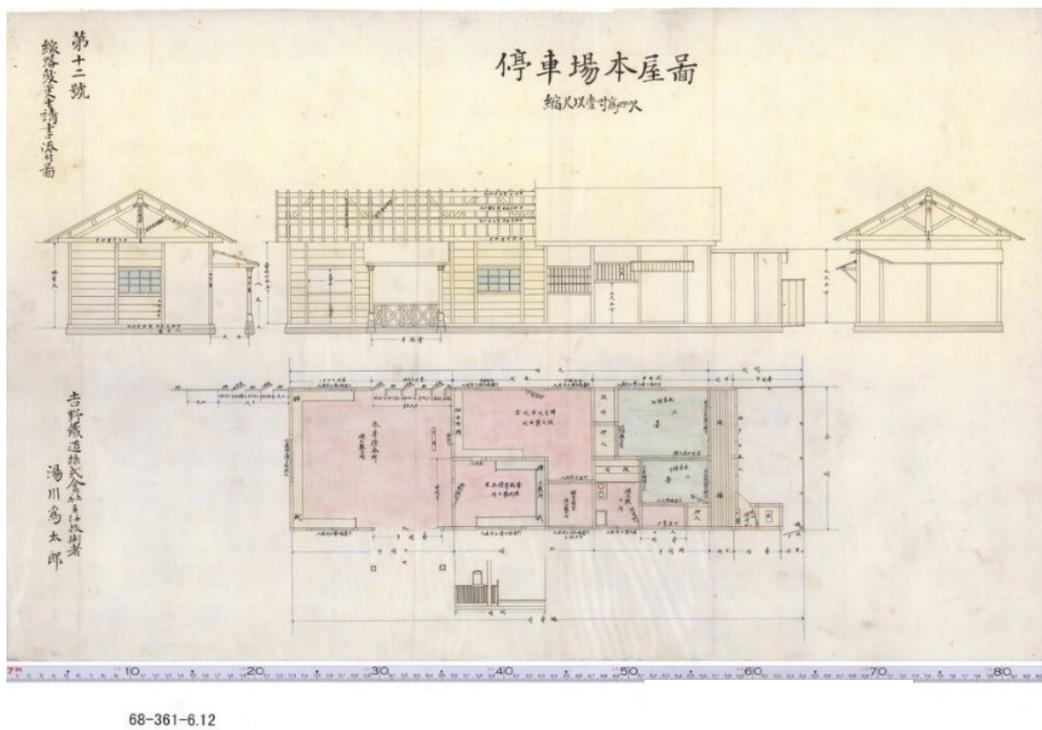
二代目 畝傍駅駅舎(1928年・昭和3年)



三代目 畝傍駅駅舎(1940年・昭和15年)

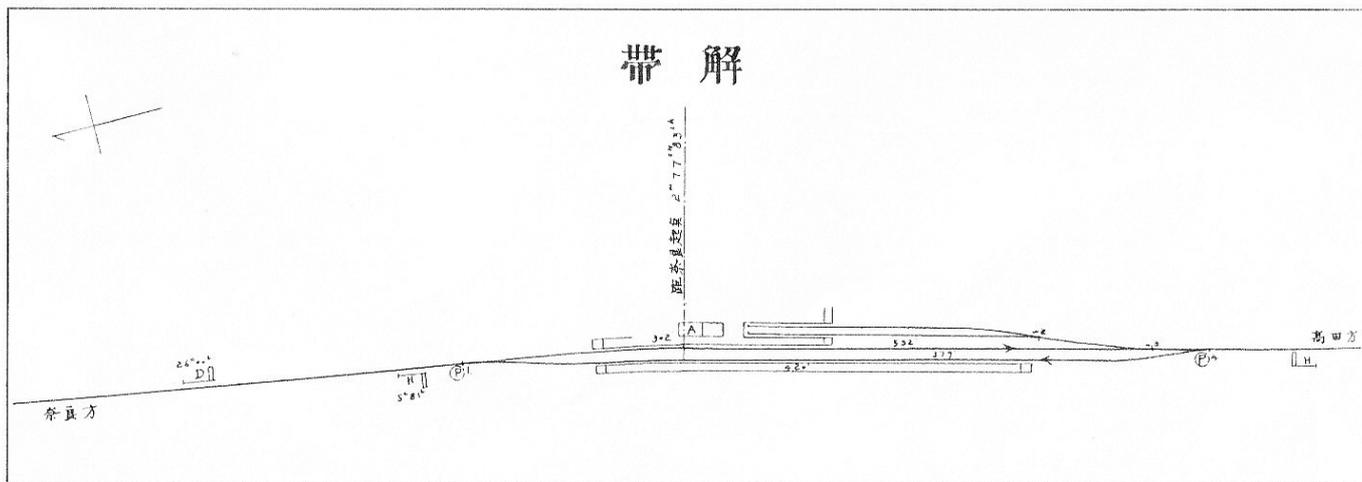
3 明治 34 年(1901)？の吉野鉄道停車場本屋図(奈良県立図書情報館蔵)

吉野鉄道は、現近鉄吉野線の原形となった鉄道で、明治 29 年(1896)に敷設免許を申請、明治 30 年吉野鉄道株式会社設立。明治 32 年に敷設免許を受けるも、明治 35 年に会社は解散。下図停車場は建設予定の停車場本屋図であろう。図書情報館には、六田(構内全体図)、下湊停車場(構内全体図、明治 34 年作成)、葛停車場(構内全体図)が残っている。



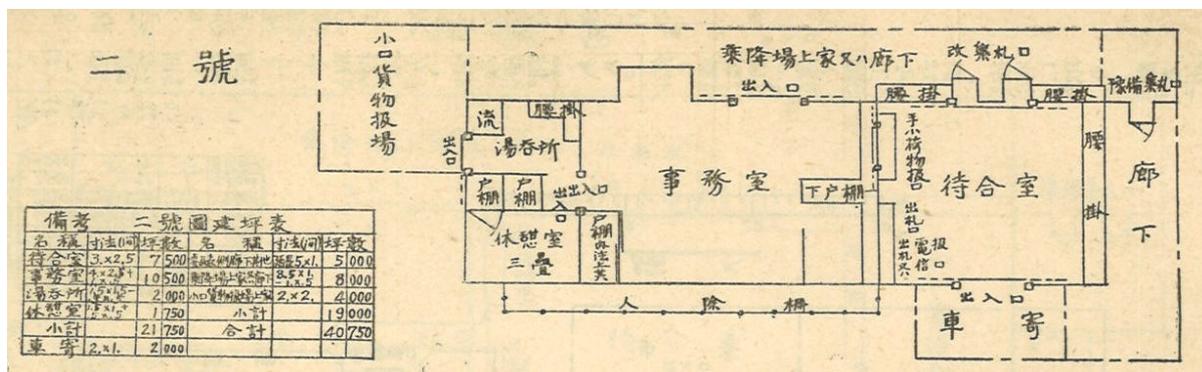
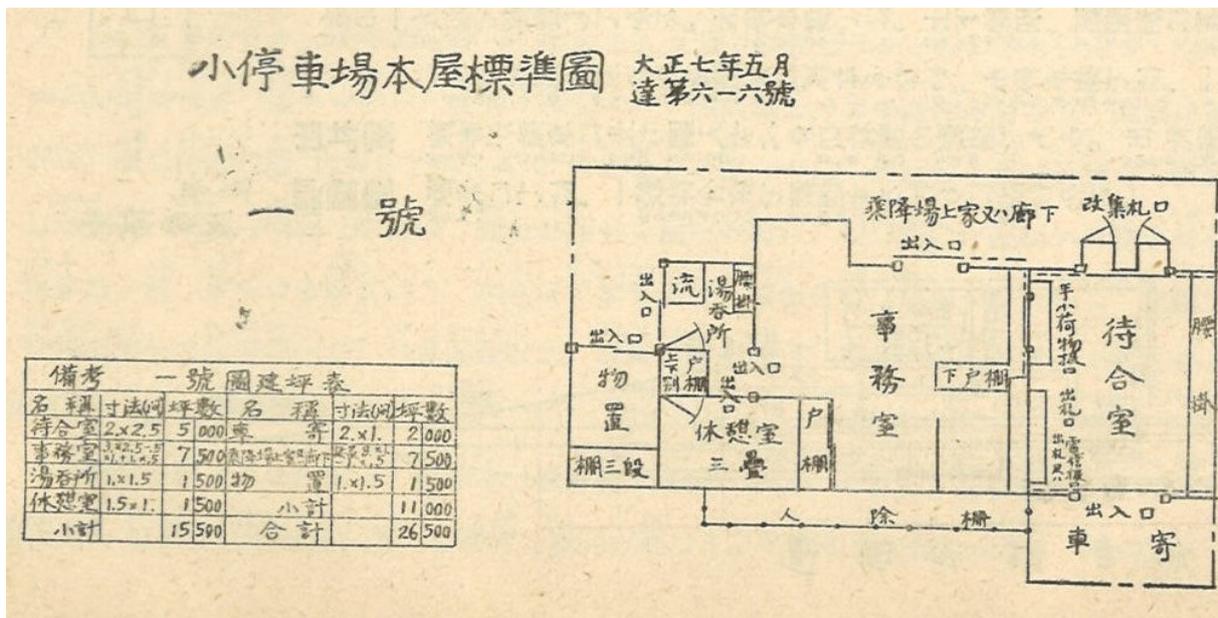
68-361-6.12

4 明治 43 年(1910)1 月現在の帯解駅構内図 奥田晴彦『関西鉄道史』(鉄道資料保存会、2006 年 7 月)から



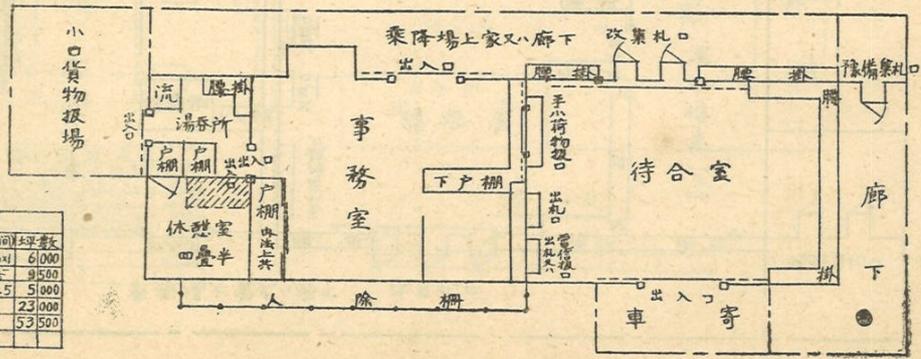
* 帯解駅舎は長形状に記載されており、この時点では、北側張り出し部 (②) は増築されていない様だ。

5 大正 7 年(1918)の小停車場本屋標準図 木原英一『現代鐵道草叢書 線路及停車場』(鉄道会出版部、昭和 2 年(1929)7 月、京都鐵道博物館蔵)



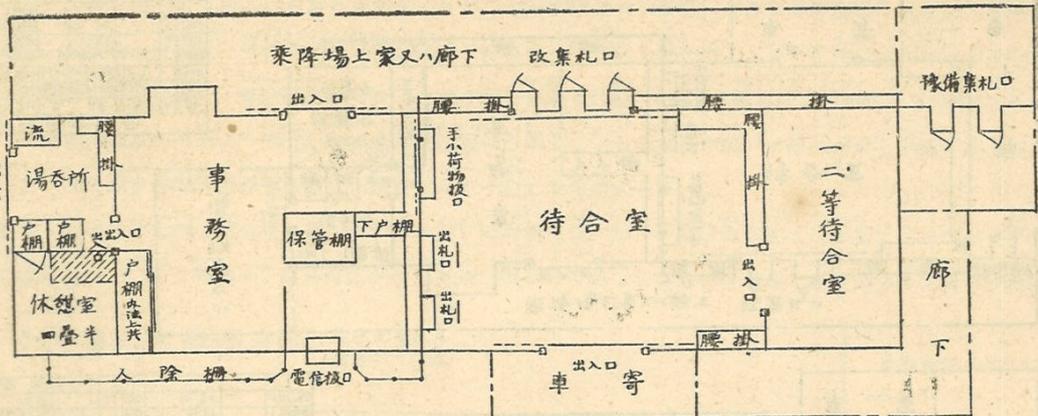
三 號

名稱	寸法(四)	坪數	名稱	寸法(四)	坪數
待合室	4.5x3	13.500	事務室	4.5x3	13.500
湯吞所	2.000	2.000	休憩室	2.5x2.5	6.250
小計		30.500	合計		53.500



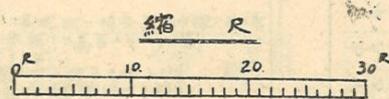
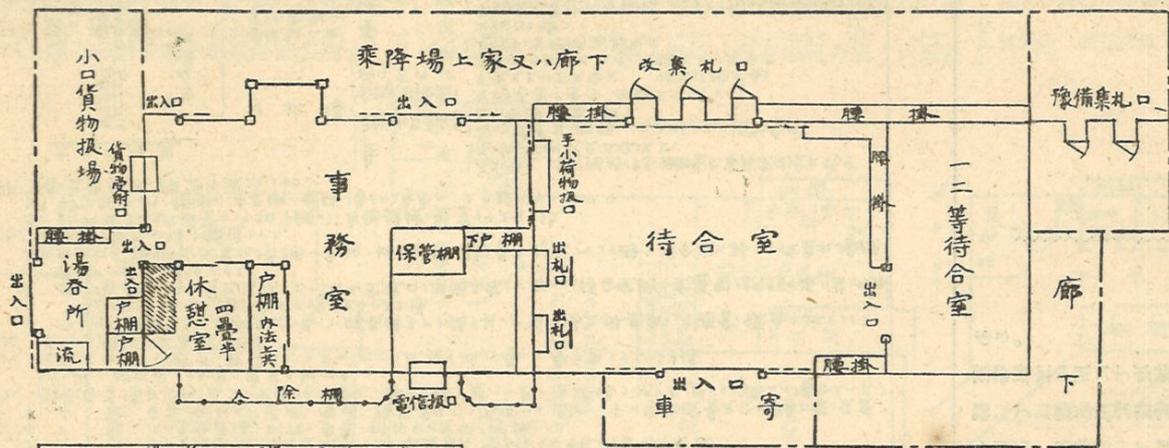
四 號 甲

名稱	寸法(四)	坪數	名稱	寸法(四)	坪數
待合室	5x3.5	17.500	車寄	3x1	3.000
二等待合室	2x3.5	7.000	事務室	4.5x3	13.500
湯吞所	2.5x2.5	6.250	休憩室	2.5x2.5	6.250
小計		34.000	合計		80.000



四 號 乙

名稱	寸法(四)	坪數	名稱	寸法(四)	坪數
待合室	5x3.5	17.500	車寄	3x1	3.000
二等待合室	2x3.5	7.000	事務室	4.5x3	13.500
湯吞所	2.5x2.5	6.250	休憩室	2.5x2.5	6.250
小計		40.500	合計		85.000



小停車場本屋標準図1号～4号と現帯解駅舎との比較

	面積	備考
帯解駅舎	本屋①98.4 m ² +②13.9 m ² 計 112.3 m ²	
1号	51.2 m ² (待合室、事務室、湯呑室、休憩室)	
2号	71.8 m ² (")	小口貨物扱場有
3号	100.9 m ² (")	小口貨物扱場有
4号甲	151.8 m ² (")	待合室奥に1・2等待合室有
乙	145.9 m ² (")	待合室奥に1・2等待合室有、小口貨物扱場有

*帯解駅舎でいう本屋①比較では、帯解駅舎は3号タイプが該当する。

*本屋①+②での比較では、4号タイプより面積は少ないが、②の貴賓室、あるいは特別待合室と呼ばれていた②の部分が4号甲タイプの1・2等待合室に符号する可能性がある。

*3号、4号甲タイプとも待合室の後部や周りに予備集札口と廊下を備えているが、帯解駅に設置されていたかどうかは今後の調査に待たなければならない。

*大正7年以降は標準図が作成されていない（日本国有鉄道百年史第9巻）ので、帯解駅舎の大正15年の大改築は本標準図を参考にした可能性が高い。②の増築もこの時期の可能性はある。

但し、帯解郷土研究会編『帯解郷土誌』（昭和28年4月1日発行、58年再版）によると、大改築は大正15年8月に始まり翌昭和2年の1月の竣工となっており、②の部分の増築の記載はない。

大改築前の大正9年（1920）12月には湯呑場が設置されている。

大正十五、八 駅舎大改築工事着手せらる。

大正十五、十一 全工事 竣工駅長官舎分離せらる。

大正十五 十二 浴場改築工事着手せらる。

昭和二 一 全工事竣工せらる。

<参考駅舎>

因美線美作滝尾駅（岡山県津山市堀坂）：1928年（昭和3年）に建てられた「昭和初期の標準的な小規模駅舎」という点が評価され、2008年11月1日、登録有形文化財（インターネット情報）



*手小荷物扱口と出札口は直線の間仕切り形状となっており、改札口から手小荷物扱口・出札口の順で配置されている。

*出札口前の細い線であるが、『現代鐵道草叢書 線路及停車場』には「出札室の前面は混雑し易いから、之を制止する為、二尺位を隔て、隔柵を設ける」とあり、以下の尼崎港駅、西馬音内駅の様な木柵のことかと思われる。



福知山線尼崎港駅

昭和 46 年 (1971) 撮影 (山田倶楽部写真館)、明治 24 年開業、昭和 59 年廃駅



西馬音内駅

秋田県の羽後交通 雄勝線の駅
昭和 3 年 (1928) 開業、昭和 48 年 (1973) 廃駅

6 大正 15 年(1926)の帯解駅の大改築と円照寺との関係

帯解郷土研究会編『帯解郷土誌』(昭和 28 年 4 月 1 日発行、58 年再版) から、関連事項を下記に記述する。

- ・ 1669 年 (寛文 9) 十一月 円照寺八島御所ヨリ今ノ地ニウツサレ、コレガ山村御殿トヨンデ今日ニ及ブ (円照寺略縁起)
- ・ 1874 年 (明治 7) 円照寺 伏見宮文秀女王こらる
- ・ 1893 年 (明治 26) 初瀬鉄道、帯解駅開通 六月三十日、五ヶ谷街道開通
- ・ 1898 年 (明治 31) 五月八日、帯解駅 奈良鉄道株式会社の延長初瀬線として営業開始す
- ・ 1904 年 (明治 37) 帯解駅、奈良鉄道株式会社は、元の関西鉄道株式会社へ合併
- ・ 1907 年 (明治 40) 十月、桜井線 国となって政府へ引き継がれる (帯解駅)
近時、帯解停車場ヨリ同寺に至る道路ヲ修繕シテ馬車ヲ通ズルヲ計レリト。
- ・ 1908 年 (明治 41) 十一月十二日、本村今市御野立場ニ天皇陛下 (明治天皇) 行幸遊バシ親しく大演習ヲ統監シ給フ (学校沿革誌)
- ・ 1911 年 (明治 44) 四月、帯解駅に電燈設備さる。
- ・ 1920 年 (大正 9) 十二月 湯呑場併設せらる
- ・ 1926 年 (大正 15) 二月十五日、円照寺 伏見宮文秀女王逝去さる。二月二十三日、同 葬儀執行サル
八月 駅舎大改築工事着手せらる。十一月 全工事竣工駅長官舎分離せらる。
十二月 浴場改築工事着手せらる。
- ・ 1927 年 (昭和 2) 一月 全工事竣工せらる。
- ・ 1935 年 (昭和 10 年) 九月 帯解駅に逓信省電話設置さる (帯解四九番)

これ以降昭和 28 年まで、帯解駅に関わる記載なし。

*当時の駅舎は、明治 31 年の開設から 28 年が経過し、大改築の時期に来ていたこと。2 月には伏見宮文秀女王が逝去。半世紀ぶりに新門跡を迎えるに当たり、急遽、大改築がなされた可能性が高そうに思われる。

但し、そのためには、帯解駅と同時期の明治 31 年に開設した京終駅、櫛本駅、丹波市駅、柳本駅、三輪駅の改築時期と帯解駅の大改築時期との違いも調べる必要がある。

前掲の『鉄道 100 年記念写真集—日本の駅』の桜井線・奈良線の駅舎の改築時期をみてみると、桜井線の京終駅は昭和 46 年 1 月一部改築か改修、柳本駅は大正 3 年に一部改築か改修、昭和 5 年 11 月に一部改築か改

修、三輪駅は大正3年4月全面改築、天理駅は昭和40年9月1日全面建て替えとなっており、柳本、三輪駅の方が、大正15年の帯解駅よりも早い段階で改築、改修がおこなわれていたことになる

また、奈良線でみると、長池駅は大正元年9月一部、棚倉駅は昭和47年4月に一部となっており、長池駅が大正15年改築の帯解駅と同年代ということになる。

以上の改築あるいは改修年から、帯解駅の改築が伏見宮文秀王女の逝去を受けて急遽、大改築がなされたことを決定付けることは難しく、大正15年の大改築が老朽化によるものか、それとも文秀王女の逝去を受けたのものなのかの判断は、別途、調査が必要である。

また併せて、帯解駅の待合室の形状（1・2等待合室の北側への落ち棟張り出し）と同型の駅舎は「日本の駅」の掲載写真では見当たらず、帯解駅独自の形状の可能性もあり、増築であったか否か、またその時期も含めて調査が必要となる。

いずれにしても、1・2等待合室の出入り口や天井等の室内のしつらえは、畝傍駅の貴賓室を参考にしながらも、清楚かつ気品ある内装整備となるだろうか。その際、困難かとは思いますが、大正・昭和初期の1・2等待合室の写真を参考資料として見つけ出す必要がある。

但し、三島由紀夫の『豊穰の海（一）春の雪』（昭和44年）の帯解駅の描写では「娘は一等待合室に残して」とある。作品の舞台は大正初期なので、この頃に1・2等待合室があった可能性も無きにしもあらずであるが、明治43年（1910）1月現在の帯解駅構内図を見る限り、北側への落ち棟張り出しの現待合室の形状は記載されていない。

大正15年の大改築の前に、大正7年の標準図1・2等待合室を参考に増築された可能性もあり、今後の検討が待たれる。

< 貴賓室、1・2等室参考写真 >



畝傍駅貴賓室

明治26年（1893）開業、2代目 昭和3年（1928）、3代目 昭和15年（1940）



長浜駅1・2等待合室（現長浜鉄道スクエア、開業は明治15年（1882）、日本最古の駅
当時の記録によると、一等二等待合室にはビロード張りクッションの長椅子3脚が置かれており、八角形の釣りランプが付いていた。（HPから）



門司港駅 1・2 等待合室
 明治 24 年 (1891) 開業、重要文化財
 現駅舎は大正 3 年 (1914) 築



神戸港駅 1・2 等待合室
 明治 7 年 (1874) 開業、
 現駅舎は昭和 5 年 (1930) 築



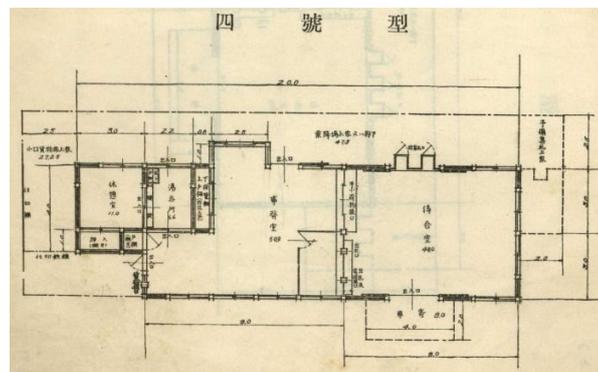
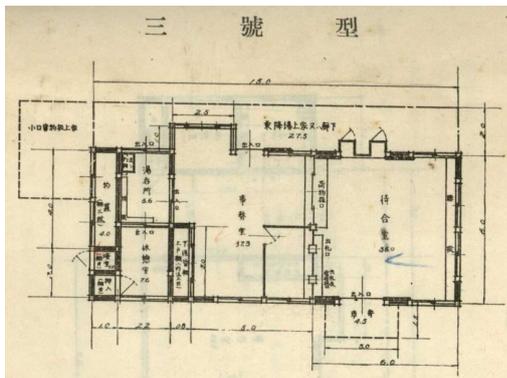
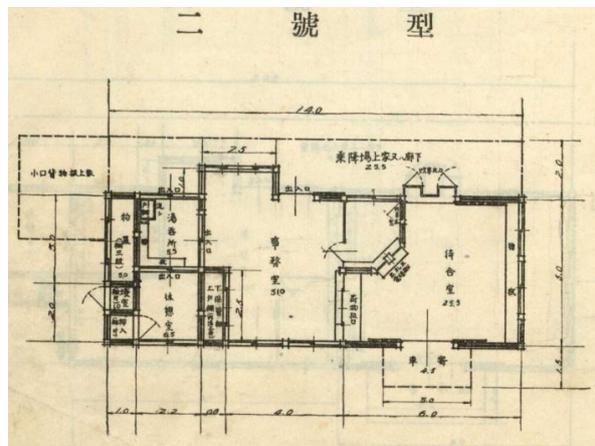
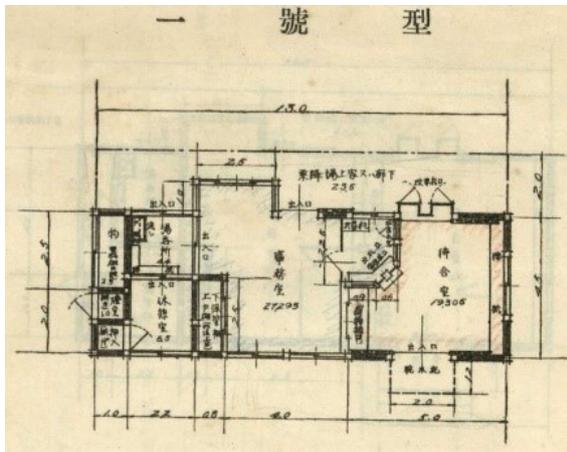
大社駅 2 等待合室
 明治 45 年 (1912) 開業、重要文化財
 2 代目駅舎は大正 13 年 (1924) 築、
 現在、保存修理中

*以上の写真は、インターネットから入手



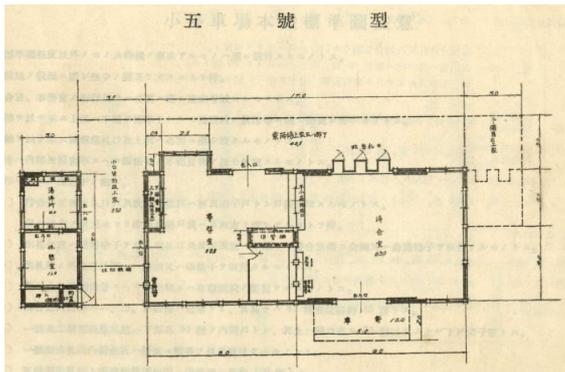
青森駅連絡待合所 1・2 等待合室
 昭和 10 年 (1935) 前後か
 青森駅は明治 24 年 (1891) 開業、明治 39 年 (1906) 改築
 西部 均氏蔵

7 昭和 5 年 (1930) の小停車場本屋標準図



小停車場本屋標準圖面積一覽表

	一 號	二 號	三 號	四 號	五 號
待 合 室	19,305	25,500	36,000	48,000	63,000
事 務 室	27,295	31,000	37,300	50,900	58,500
湯 呑 所	4,400	5,500	6,600	6,600	9,000
休 憩 室	6,500	6,500	7,600	11,000	11,000
小 計	57,500	68,500	87,500	116,500	141,500
乗降場上家又へ廊下	23,500	25,500	27,500	47,500	48,500
車 寄	—	4,500	4,500	8,000	10,000
物置及燈室	3,500	4,000	5,000	—	1,000
小口貨物扱場上家	—	—	—	27,250	35,000
小 計	27,000	34,000	37,000	82,750	94,500
合 計	84,500	102,500	124,500	199,250	236,000



小停車場本屋標準図 1号～5号と現帯解駅舎との比較

	面積
帯解駅舎	本屋①98.4 m ² +②13.9 m ² 計 112.3 m ²
1号	57.5 m ² (待合室、事務室、湯呑室、休憩室)
2号	68.5 m ² (")
3号	87.5 m ² (")
4号	116.5 m ² (")
5号	141.5 m ² (")

*帯解駅舎本屋①比較では、帯解駅舎は3号タイプが該当する。①+②での比較では4号タイプに当たる。

8 昭和30年代初めから40年代初めの帯解駅の写真

下記の写真は、『帯解郷土誌』の編者である廣瀬広中氏(下山町)の撮影になる昭和35年頃の写真である。

写真提供：廣瀬政彦氏(奈良市下山町) 資料撮影協力：奈良市教育委員会文化財課

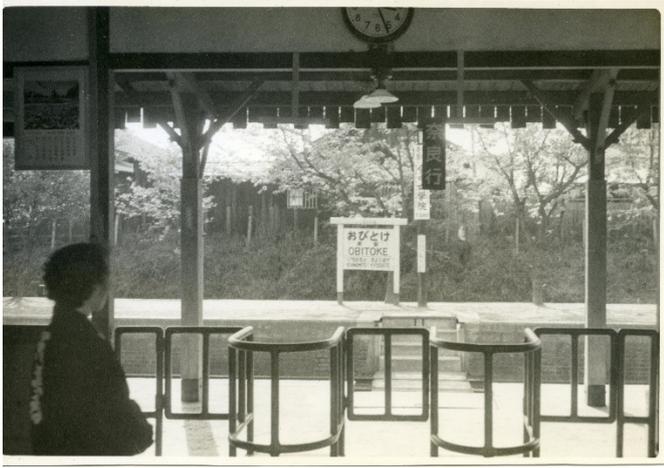


昭和34年8月30日撮影



昭和35年7月2日撮影

*昭和34年8月30日の写真から、荷受コーナーと切符売場の間仕切りは東西の直線状で、改札口側から荷物扱口・出札口の順となっており、大正15年の大改築時から引き継がれた形状と思われる。



昭和 43 年 4 月 17 日撮影



昭和 40 年 6 月 2 日撮影



昭和 35 年 7 月 2 日撮影



昭和 33 年 8 月 12 日撮影

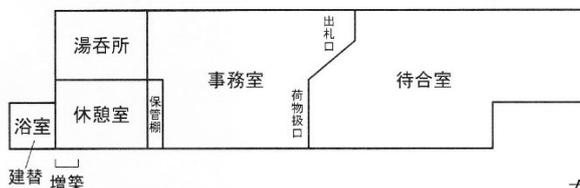


昭和 34 年 4 月 17 日撮影

9 現在の帯解駅舎について

<待合室と駅務室の間仕切について>

昭和40年代頃



奈良市教育委員会文化財

「1 現在の駅舎平面と推定変遷図（奈良市教育委員会文化財課）」によると、出札口と荷物取口の間仕切形状への改修は昭和40年代頃と記している。

『鉄道100年記念写真集—日本の駅』が発行された昭和47年（1972）当時の桜井線の駅舎の写真を見ると、あきらかに樺本駅と三輪駅は上記形状となっている。

残念ながら帯解駅内部は暗くて判別は困難であるが、樺本駅、三輪駅の写真から、帯解駅も昭和47年以前に改修がなされたものと思われる。



桜井線
いちの
樺本

①明治31年5月11日 ②不明 ③なし ④なし ⑤天理
教本部（南東3km） 弘仁寺（東2km） ⑥なし ⑦天



桜井線
三輪

①明治31年5月11日 ②大正3年4月（全部） ③なし
④なし ⑤三輪山（東500m） 大神神社 山の辺の道

<40年代以降の帯解駅（除く、廣瀬政彦氏提供写真）>

昭和47年当時か、以前



桜井線
帯解

①明治31年5月11日 ②不明 ③なし ④なし ⑤円照
寺（皇族の尼寺） 正暦寺 ⑥なし

昭和54年当時か、以前



『鉄道100年記念写真集—日本の駅』
（昭和47年発行）から（再掲）

『国鉄駅名全百科』（昭和54年
（1979）発行）から

昭和 58 年当時か、以前



『国鉄全線各駅停車 8 近畿 400 駅』
(昭和 58 年 (1983) 9 月発行) から

『駅舎国鉄時代 1980 〳s』
(令和 4 年 (2022) 3 月発行) から

10 昭和初期の駅舎を復元(京都鉄道博物館) 撮影 2023 年 1 月 6 日



<参考文献>

- ・奈良市教育委員会文化財課 山口勇「帯解駅本屋について」
- ・交通設計・駅研グループ『駅のはなしー明治から平成までー』（交通研究協会、平成6年12月）
- ・内田録雄編『鉄道工事設計参考図面』（共益商社書店、1898年6月、土木学会土木図書館所蔵）
- ・加藤優平、平野勝也「戦前の国有鉄道における駅等級制度の運用実態」（景観・デザイン研究講演集 N011 December2015）

本論文によると、明治31年『鉄道工事設計参考図面 停車場之部』中には、「停車場建築規定ノ圖」、「壹等停車場規定の圖」、「普通停車場及附属建物之圖」があり、「停車場建築規定ノ圖」には貳参等、四等、五等の各等級の図面が掲載されているとしている。

- ・国書刊行会編『懐かしの停車場 西日本編』（平成22年4月20日発行）
- ・明治34年（1901）？の吉野鉄道停車場本屋図（奈良県立図書館蔵）
- ・奥田晴彦『関西鉄道史』（鉄道資料保存会、2006年7月）
- ・木原英一『現代鉄道草叢書 線路及停車場』（鉄道会出版部、昭和2年（1929）7月、京都鉄道博物館蔵）
- ・帯解町郷土研究会編『帯解町郷土誌』（昭和28年4月1日発行、58年再版）
- ・日本国有鉄道編『日本国有鉄道百年史第9巻』（日本国有鉄道、昭和47年3月）
- ・昭和5年（1930）の小停車場本屋標準図（鉄道大臣官房法規課編纂『鉄道法規類抄 第十八編工事圖面（下）、国立国会図書館蔵』）
- ・鉄道ジャーナル社編集発行『鉄道100年記念写真集ー日本の駅』（昭和47年10月14日）
- ・宮脇俊三、原田勝正『国鉄全線各駅停車<8>近畿400駅』（小学館、1983年9月1日）
- ・橋本正三『駅舎国鉄時代1980's』（2022年3月29日、イカロス出版）

*本屋変遷資料の作成に当たっては、西部均氏から多くの関連情報の提供を受けました。